

---

# 光を求め、光を拒む青年

ゴードン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光を求め、光を拒む青年

### 【Nコード】

N7339X

### 【作者名】

ゴードン

### 【あらすじ】

重い過去のせいで光を拒み続ける青年、吉井明久。彼は色々な人に出会い変わっていく。

これは闇の中で光を求める青年と、その仲間の物語。

〈主人公紹介かもしれない〉（前書き）

今回は主人公の明久の人物紹介と召喚獣のネタばれ。

挿絵注意！！

## 〈主人公紹介かもしれない〉

よしあきひさ  
吉井明久

### 【詳細】

本作の主人公。性格は原作とはちがい、優しくなくてクールになった。

基本、一人でいることが多かったが雄二や秀吉が絡んでくるようになったため嫌がっている。だが、拒絶しないあたり、本当は嬉しいのかもしれない。

鈍感なのは変わってない。性の知識が増えるためムツツリー二にも好かれた。

中学は両親や姉と海外にいた。身体能力はこの時に強くなりたいたと思っただけものすごく高い。

過去（中学時代）に大きな傷があり、絆を失うのが怖いため友達や親友と呼べる存在を作らないでいた。

顔も原作と結構違う。

> i 3 3 6 5 0 — 4 2 5 1 <

試験召喚獣

### 【詳細】

明久の中の負の感情に引き寄せられたバグ。だが他の召喚獣と違い、フィールド外でも召喚でき物理干渉もできる（on/off可能）

他の召喚獣と大きさは同じで、力もあまり変わらない。

装備は紫の炎を纏った妖刀ムラマサに改造学ラン（中に暗器や銃などが仕込んである）

> i 3 3 6 4 5 — 4 2 5 1 <

### 【腕輪】

400点以上の点数を取ると使える腕輪。全教科400点を超えるのでほとんど使える。

### 召喚

腕輪の能力。点数を消費して、それに見合う強さの龍を召喚して操る。

### 【バグ能力】

バグを持つ召喚獣がバグを操って使う能力。

### ベクトル操作

言わずと知れたあの人が使う某学園都市の最強の能力。だが、教師には反射と言っている。（そうしないと兵器として使われるかも知れないから）

非常に燃費が悪いが、使えば最強の能力。

〈主人公紹介かもしれない〉（後書き）

明久「原作とは結構俺の顔が違うな」

ゴードン「これでも頑張って書いたんだぞ！」

明久「いや知らんけど……。まあ、挿絵の入れ方が分かって良かったな」

ゴードン「ああ。これからも応援よろしくお願いします」

## へびろろーぐらしきもの (前書き)

また新連載です。自分の妄想をたくさん詰め込むと思います。

《ぶるーくらじきまの》

- side ????

「 【クン！】 【クン！】

「（なんだよ…僕は寝たいんだ…）」

「起きてよ… 【クン…】」

「（僕がなんだ？ ここにいるだろ僕は…）」

「うう…ワタシのせいだ…」

「（何言ってるんだこの子は…ん？ なんて何も見えないのに女の子だってわかったんだろう。）」

「ゴメンネ… 【クン…】」

「（あと、何だろこの懐かしい感じ）」

「…サヨナラ」

「ヨシイクン…」

【Therefore, I am disagreeable】

- side 明久 -

「うわっ!!」

バツ、と俺はベットから飛び起きる。

「また昔の夢か……」

パジャマは汗びっしょりで、ぬれていた。

「シャワーでも浴びるか……」

あ、説明を忘れていたけど俺は吉井明久。ちょっと捻くれた普通の高校生である。

俺はシャワーを浴び、その後ご飯を食べた。

「ふう、そういえば今日は、振り分け試験の日だったな」

振り分け試験とは俺の通う学校、文月学園のクラス分けのためのテストである。

AからFまでクラスがあり、2年生になると振り分け試験を行って頭がいいとAクラス、悪いとFクラスといった具合だ。

「まあ、俺ならAクラスにいけるか」

こう見えても俺は去年は学年主席でそれなりに頭いいし。

「まあ、クラスなんてどうでもいいか」

本当にどうでもいい。文月学園にはクラス設備を奪うことが出来るシステムもあるし。

「行ってきます」

そうして俺はドアに手を掛ける。

「よう！ 明久！」

誰かが俺に声をかけてくる……こいつは……。

「…………… (スタスタ) 」

「おい、明久？」

「…………… (スタスタ) 」

「お、おい。明久？」

「…………… (スタスタ) 」

「シカトすんなよ!!」

「……なんだよ坂本……」

コイツは坂本雄二。不幸が重なり合って、コイツと友達になってしまった……。

「どうせ目的地一緒だろ？ 一緒に行こうぜ」

「断る、消えろ、死ね」

「何でそこまで言うんだ!？」

コイツはいつも慣れ慣れしい。俺は一人でいたいのに……。

「はあ、何で俺なんかを誘うんだよ……」

「そりゃあ俺とおまえは友達だろ」

「……本音は？」

「お前といると、翔子が襲って来ないからな……」

はあ、また俺はこの悪友と一緒に過ごすことになるのか……。

「じゃあ問題だ明久。三権分立は【司法】と【立法】ともう一つは何で成り立つか？」

「…舐めすぎだろ、【行政】だ」

「おお、流石だな」

「じゃあ次は俺だな。日本の水墨画を完成させた画家は？」

「……は？」

「……小学生レベルだぞ」

「……すまん……」

## へびるるーへらじきもの【じっ】く (前書き)

少しずつ明々の過去を日記形式で出そうと思います

《ぶるるーくらじきもの【じつ】》

- side ????

じがつ・じゅうじち

ぼくはともだちがほしかった。

ぼくはしんゆうがほしかった。

ぼくはなかがまがほしかった。

ぼくはこいびとがほしかった。

ぼくはひつようとされたかった。

ただそれだけのことだった。

なのに……。

なのに……。

ただそれだけだったのに……。

なんでぼくはまたひとりになっちゃうんだろう。

なんで……なんで……

【I would like to be needed . . . .  
】

- side 明久 -

「うぐっ…！」

俺は坂本と一緒に学校へ行き、今はテストを受けている真っ最中だ。ただど今はそれどころではない、俺は過去のことをふと思い出してしまった。

頭痛は痛いし吐き気もする。……思い出したくないのに………忘れたいの………。

「吉井。大丈夫か？ 退席するか？」

俺へ声をかけるのは西村先生。みんなは鬼の鉄人などと呼んでるが良い先生だと思う。

「うっ………だ、いじょうぶです………」

はっきり言っただけかなりヤバイ……。頭が回らない………。

「………そうか。無理するなよ」

西村先生は心配してくれるけど……。いや………良いんだ。どうせみんな裏切るから………。

「くっ！ ……はぁ…はぁ」

ヤバい……意識……が…。

ドサツと音をたてて倒れこむ俺。

「…！ 吉井！ おい吉井！」

「……ここは……」

俺はどつやらベットに寝ていたようだ。

「あっ、起きたかしら？」

確か保険室の先生か……。邪魔になるから早く出ないと……。

そして俺は立ち上がり保健室を出ようとする。テストはどうなったのかな…？

「大丈夫なの？ かなりうなされてたみたいけど」

「はい、ご迷惑おかけしました……。あのテストの方は？」

「もう終わったわよ。それに時間も下校時間過ぎてるし……」

「………そっですか」

これで俺は途中退席扱いになってしまつてFクラスだろう。

「西村先生は学園長に抗議したんだけどね……。学園長はそれを刀両断してしまつてね……」

「まあ、過ぎたことを気にしても仕方ないです。……さようなら……」

- side ???? -

ろくがつ・にじゅうなにち

そうか……けっきょくみんなうらぎるんだ。

だったら……きずななんていらないよ。

【e It is already and disagreeable

## 〈第一問〉 夢と現実（前書き）

やっと、第一話です。

結構、性格を変えるのって大変です。

〈第一問〉 夢と現実

- s i d e    ? ? ? ? -

7月・18日

俺は友達なんていない。

俺は親友なんていない。

俺に仲間なんていない。

俺は恋人なんていない。

だから……僕は一人。

【I t   r e f u s e s .】

- s i d e    明久 -

俺がこの文月学園に入学して2度目の春が訪れた。

俺は振り分け試験で倒れてしまったからクラスは決まったも同然だった。

ちなみに俺は家を遅刻出来る時間に出た。

毎日アイツと一緒に登校なんて反吐が出る。

「吉井、遅刻だぞ」

学校の校門で声を掛けられる。

「おはようございます。西村先生」

声を掛けられた方を見ると生活指導の西村先生が立っていた。

「ああ、おはよう。早速だが…ほら、受け取れ」

先生が封筒を取り出し俺に差し出す。

「……もうクラスは分かってますから良いのに……」

「まあこれがうちのやり方だな。……それと、すまなかったな吉井。俺がすっかりしていれば……」

「いえ、気にしてないですよ。俺が体調管理をすっかりしなかったのが悪いんですし……」

「……そうか」

先生がバツが悪そうに言う。

「じゃあ、俺は行きますね」

ビリビリと紙を破り捨てる。

『吉井明久……Fクラス』

「ここがFクラスか……」

俺は二年Fクラスと書かれたプレートの前に立っていた。

「まあ気にしてもしょうがないか……」

慣れ慣れしいバカがいなければいいや。

「すいません遅れました」

「おっ、来たか明久」

………何で？ ……何でいるの？

「何でお前がいるんだよ坂本……」

「何でって、そりゃあ俺がこのクラスの代表だからな」

はあ………よりもよってこいつが代表かよ。変なこと考えるなよ………。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

「で、坂本。席はどこだ？」

「基本は自由席だ」

うわっ、ほんと適当だな……。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

背後から声をかけられる。高校生には見えないので担任の先生だろう。

「それと席についてもらえますか？ HRを始めますので」

「はい、わかりました」

「うーっす」

そして俺たちはそこらの席に着いた。……何で近くに座るんだよ。

「えー、おはようございます。二年Fクラス担任の福原慎です。よろしく願います」

……チョークすらないのかこのクラスは。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば申し出てください」

そしてみんなから不備の申し出が出るが、すべてを軽く受け流す。……慣れてるんだろうか？

「必要なものは極力自分で調達するようにしてください」

本当に適当だな……このクラス。

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

ああ、こいつもFクラスか。

木下秀吉。女に見えるほどの女子顔でよく坂本と一緒に俺に関わってくる。

「と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

ほんと女に見間違うな。クラスの男子、鼻の下が伸びてるぞ……。

「……………土屋康太」

次は土屋か。あんまりつるんで来ないのは嬉しいけど、写真を撮ってくるのが鬱陶しい。

「です。ドイツ育ちで日本語は苦手です。趣味は」

げっ、この声は……。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

ほんと、迷惑なやつだな……。

「はるはるー」

「……ちっ」

コイツは島田美波。俺はこいつが嫌いだ。

「……です。よろしく」

俺の前の奴が終わったか。

「吉井明久だ。好きなものはない。嫌いなものは人間（特に島田、坂本だ）だ。よろしく」

「人間が嫌いな人間なんて聞いたことがないぞ」

「うるさい。死ね坂本」

何でコイツは俺にかかわるんだよ……クソったれが……。

「あの、遅れて、すみません……」

『え？』

「はあ？」

何でだ？ 何でこいつがFクラス何かにいる……。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん  
もお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします  
……」

……何でお前がいるんだ……姫路瑞希ッ！

【You are disagreeable . . .】

〈第一問〉 夢と現実（後書き）

明久は姫路さんを嫌っています。  
理由は聖者と悪党は対場が逆だからでしょう。

## 〈第二問〉 戦争の引き金（前書き）

学校のテストの時期が終わりました!!  
もっと早く更新出来るように頑張ります。

## 〈第二問〉 戦争の引き金

- side 明久 -

「はいっ！ 質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

いきなり質問をされる姫路。こいつの学力は学年トップクラスのはずだぞ……。

何でこんなところにいるんだよ……。

「そ、その……」

そういえば確かこいつは頭はいいけど体が弱いんだっとな。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

「なるほど、明久と同じ理由か」

「チッ……。なんでこうなんだよ……」

この学校では試験を途中退席した場合、試験は0点扱いになってしまふのである。

これで俺や姫路はFクラスになってしまふというわけである。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

……本当にバカだらけだ……。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように僕と雄二の隣の空いている卓袱台に座る姫路。

……席変えようかな……。

そして俺が席を変えようとしてると坂本の声が聞こえてきた。

「姫路」

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

……………どうでもいいや……………。

俺はその辺の奴を蹴り飛ばし、席を譲ってもらおう。

「おい、黙って俺たちから距離を取ろうとするな明久」

「よ、吉井君!？」

「……………何だよ……………?」

「あ、いえ……………」

ま、お前は俺みたいなやつが嫌いだろうしな。

「んで明久、少し話があるんだが」

「あ?」

こいつが俺に話したいこと……………?

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

「あ、すんませ」

坂本が謝ろうとして……………。

バキィッ バラバラバラ……………

突如、先生の教卓がゴミ屑と化す。おそらくパンパンと叩いたからだろう。

「え〜……替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうに告げて、先生は教室を出ていく。

「……坂本、話って何だよ？」

「ああ、こごじゃ話にくいから廊下でいいか」

「……？ ああ」

立ち上がって俺たちは廊下に出る。

「んで、何だよ話って？」

「お前、Fクラスをどう思う？」

「うぜー奴らが多くて嫌いだ」

「いや、そうじゃなくて。設備が酷いだろ」

「ああ、確かに……って俺に協力しろってか？」

「そんな所だ。お前はあの設備でいいのか？」

「ああ」

クラスのメンバーがもうすでにアレだし、設備なんてどうでもいい。

「はあ、相変わらずだな。ま、協力したくなったら言ってくれ」

「絶対ないと思うが……。一応聞いておくがどこに仕掛けるんだ？」

「Aクラスだ。世の中、学力がすべてじゃないって証明したくてな。それに秘策もある」

「なるほど……。あ、先生が戻ってきたし教室に戻るか」

「おう」

俺たちは教室に戻る。

「えー、須川亮です。趣味は」

先生が教卓を替えて、自己紹介を再開。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

特に何もなく最後の一人の坂本に順番が回る。

「坂本君はクラス代表でしたよね？」

福原先生に言われてうなづく雄二。

「Fクラスの代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

「さて、皆に一つ聞きたい」

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「ほんとに酷い設備だな」

「ああ。そしてAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

「不満はないか？」

『『『『大ありじゃあつ!!』『』『』『』』

二年Fクラスの魂の叫び。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あんまり差が大きすぎる!』『』

「皆の意見はもつともだ。そこで」

皆の反応に満足したのか、自信に満ちた不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

【Now, I will begin war.】

〈第二問〉 戦争の引き金（後書き）

ゴードン「どうも初めまして!! 作者のゴードンです!!」

明久「あれ、何しに来たんだ作者？」

ゴードン「おっ、よう明久。いやさ、後書きで書くことがないから  
さ雑談とかキャラの設定とかを書いたりしようと思うんだ」

明久「てか、こういうの見たことがあるぞ」

ゴードン「ああ、あしゅきさんをリスペクトさせてもらった」

明久「ようするにパクったというわけか」

ゴードン「パクったちゃうよ。リスペクトでござるよ」

明久「喋り方おかしくなってるぞ……はあ、このバカ作者の作品を  
これからよろしくな」

ゴードン「台詞取られた!!」

### 《第三問》 根拠と証明

【a s e x p e c t e d】

- s i d e 明久 -

Aクラスへの宣戦布告。

普通に考えればFクラス何かでは無理な提案だ。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

学力の差で勝負が決まる試験召喚戦争ではAクラスとFクラスの力の差は明らかだった。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな戦力差を知っていてもなお、坂本はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけがないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

その通り何だよな……。いくら坂本が知恵が働くからと言ってそれだけでAクラスは越えれねえ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争に勝つことのできる要素が揃っている」

根拠ねえ……。確かにこいつらならやれる気がするな……。

「それを今から証明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす坂本。

……………？ 何であの野郎は顔を畳に擦りつけてんだ？

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

成程。土屋は姫路のスカートを覗くために……。

……………そこまで恥も外聞も殴り捨ててまでやる必要はあるのか？

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニねえ……ただの変態のくせに何で有名なんだよ……。

『ムツツリーニだと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうだといいのか……?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして  
いるぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

「?????」

姫路はムツツリーニこと土屋のことを知らないのか。

まあ、女子には縁のない話だしな。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆だってその力はよく  
知っているはずだ」

「えっ? えあ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

……確かにこいつは戦争では駒としては役に立つな。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

「木下秀吉だっている」

……木下秀吉。よく坂本みたいに絡んでくる。鬱陶しいことこの上ない……。

ちなみに演劇部のホープとか双子の姉のことで有名。

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学校の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

……いや、確かに二人は頭がいい。だがそのレベルの奴は挑むAクラスにはゴロゴロいるぞ。

だが士気を上げるのは成功したようだな。

「それに、吉井明久だっている」

「……………は？」

……シン

そして一気に下がる。俺は参加する気はないんだぞ!!

「おい坂本！ 何で俺の名前を出すんだ！ 俺は参加する気はないと言っただろ!!」

「士気を上げるためだ。すこし黙ってる」

『誰だよ、吉井明久って』

『いや、確かそいつって……』

『去年の学年主席、吉井明久!!』

『『何だとツ!!!!』』』

「そうだ、そいつは去年の学年主席。まぎれもない天才だ!!」

『Aクラスでも倒せないような奴がいるなら!!』

『ああ!! 勝てるんじゃないか!!』

はあ、これじゃあ俺が参加することになるじゃないか……。

「なんとかしてくれ坂本……」

「ああ。こいつは戦争に参加する気はないらしい」

『『『何イーーーーツ!!!!』』』

「ま、俺を引きずりだしてみろってことだ」

「さあ、始めようぜ。坂本」

「ああ。まずは俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

Dクラスか……。こいつのことだから色々考えてるんだろうな。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『『『当然だ!!』『』』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『『『おおーっ!!』『』』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『『『うおおーっ!!』『』』

「死者は須川にやってもらおう！ 無事大役を果たせ！」

「今、字が違かったしそれに、下位勢力の使者って酷い目に遭うよな？」

「……使者を果たせば、女子が振り向いてくれるかもしれないぞ（ボソッ）」

「すぐに行ってくる!」

……さよなら、顔も知らぬ須川……。

その後、帰ってきた死体はお亡くなりになった……。

〈第三問〉 根拠と証明（後書き）

ゴードン「だれかああッ！！ 俺に挿絵の入れ方を教えてくれえええッ！！」

明久「うるせえええッ！！ いきなりなんだ！！」

ゴードン「挿絵の入れ方が分からないんだ！ 誰か助けて！！」

明久「あー、誰か分かる人がいたらこいつに教えてやってくれ……」

## 《第四問》 作戦と必然

- side 明久 -

「さて、宣戦布告もしたことだしミーティングでもするか。明久も来るんだぞ」

そう言つて坂本は須川<sup>死体</sup>を引きずつて教室を出ていく。

……何かがおかしい気がするのは俺だけだろうか。何で皆ツッコまないんだ……？

坂本の後に皆が続く。俺はどうしようか……。

「どうでもいいか、俺はその辺をブラブラしよう……」

「明久。お主も来るんじゃないぞ」

「……はあ……」

釘を刺しやがつて……。これじゃあほんとに引けないぞ。

「しょうがねえな……」

「……………(サスサス)」

自分の頬の辺りをさすり、土屋も続く。

「おい土屋。畳の跡なら消えてるぞ……」

「……………！！（ブンブン）」

「いや、お前が変態なのは知ってるから」

「……………！！（ブンブン）」

「ここまでやってるのに否定なんて、ある意味凄いぞ」

「……………！！（ブンブン）」

「……………何色だった？」

「みずいろ」

即答かよ。

「やっぱりお前は真の変態だな」

「……………！！（ブンブン）」

こいつは色々な意味で凄いな……………。

「ほら吉井。アンタも来るの」

ぐいっと島田に腕を引っ張られる。

はあ、適当に逃げるチャンスを窺ってたのに……………。

「チツ、離せよ。……………仕方ねえなあ」

「相変わらずねアンタは」

「お前もな……」

「……一度、Das Brechen ええと、日本語だと……」

「……調教か……。せめて教育とか指導にしる……」

「じゃ、中間とってZ?chtigung」

「折檻は悪化してるだろ……」

「そつ?」

何でろくに漢字も読めねえのに、こんな余計な単語を知ってるんだ……。

俺たちは屋上にいた。

「須川。宣戦布告はしてきたな?」

「一応今日の午後に関戦予定と伝えてきたぞ」

それぞれが各々腰を下ろす。

「それじゃあ、先に飯ってことか」

「そうなるな。明久、あとで一緒に食おうぜ」

「「ええ!?!」」

姫路と島田が各々声を上げる。何だ、そんなに坂本と食いたいのか？

「断る。なんでお前と何かと……」

「まあそう言うな、女子二人がお前と食いたがってるぞ」

「「え!?!」」

突然おかしなことを言う坂本。

「はあ？ 何言っちゃってんですかあ？ こいつらは俺のこと嫌ってるだろ？」

「いや、絶対にそれはないと思うが……まあいい。とりあえず今は試召戦争の話だ。……お前らも大変だな（ぼそっ）」

坂本が話を戻す。後、何故か姫路と島田が落ち込んでる。

「雄二。一つ気になってたんじゃないが、どうしてDクラスなんじゃ？ 階段を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そついえば、確かにそうだな」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

木下と須川の疑問に坂本がうなづく。

「どんな考えですか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも、俺らよりはクラスが上だぞ？」

須川の言うことはごもつともだ。試験が終了したばかりなのだから、総合点には絶対的な差がある。

……今はな。

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。須川、お前の周りにいるメンツをよく見てみる」

「えーつと……」

坂本に言われた通り、須川は周りを見渡す。

「美少女三人と馬鹿一人、ムツツリ一人に天才が一人だな」

「誰が美少女だと!？」

「ええつ!?! 代表が美少女に反応するのか!?!」

「……………（ポツ）」

「ムツツリーニまで！？ どうしよう、俺だけじゃツッコミきれない！？」

坂本と土屋が悪ノリで須川を圧倒。…………いや、あれは素かもしれない。

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ。明久、おぬしも何とかしてくれ」

木下…………お前は女扱いされてることにきずけ…………。

「ん、そうだな。…………ツッコミって結構響きがエロいよな」

「おぬしはいきなり何を言うのじゃ！！…………ああ、しっかりするのじゃムツツリーニ！！」

ふと足元を見ると土屋が鼻血を吹いて倒れていた。

おい…………まさか今の言葉だけでイメージして倒れたのか…………。

「ま、要するにだ」

おい、お前の足元に死体が転がってることに気づけ。

「姫路と明久に問題がない今、正面からやってもEクラスには勝てる。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

「まあ、確かにDクラスは確実に勝てるとは言えないしな。モチベーションを上げるにはもってこいの相手だな」

「流石だな明久。この戦争の真の意図にも気づいたか」

「ま、打倒Aクラスを望むのなら、Dクラス戦には俺は出る必要がないと気づいて嬉しいだけだ」

Aクラスに勝つ作戦は知らんがな……。

「あ、あの！」

そこで姫路が声を上げる。

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話してたんですか？」

「ああ、戦争に勝つには必須な点数が高く、召喚獣の操作がうまい人間……つまり明久に俺から相談したんだ」

そう、俺は他の奴らよりずば抜けて召喚獣の操作がうまい。何故かは知らんが、俺の召喚獣はシステムのバグの副産物のようなものである。

召喚フィールド外でも召喚出来るし、さらに物理干涉もできる。さらに腕輪とは別にバグの能力もある。

「まっ、俺が戦争に出るかはお前らしただいな」

「ん？ どういうことだ？」

「さっき言ったろ。俺を引きずりだしてみろよ」

「へっ、上等！」

「だが坂本。さっきの話はDクラスに勝たないと意味がないぞ」

須川の心配を笑い飛ばす坂本。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

そう断言する坂本。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

ほう、まあ頑張ってみれば。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「俺たちならいける！」

「ま、俺は最初は見物といくか」

「こいつらの後押しくらいなら悪くねえかな？」  
【.】  
【.】

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

【.】  
I t c a n w i n , i f i t i s u s .  
【.】

〈第四問〉 作戦と必然（後書き）

ゴードン「明久。お前死ねよ」

明久「はあ！？ いきなりなんだ！」

ゴードン「リア充はしね、リア充は氏ね、リア充は死ね」

明久「なんか怨念唱えだした！！ どうしたんだよ？」

ゴードン「はあ、このお方はこっちでは性格変わってるはずなのに  
鈍感のままですわね」

明久「はあ？ 鈍感？ これでも運動は得意だぞ。そっいえば俺の  
性格と言えば、コロコロ変わりすぎじゃねえ？」

ゴードン「はあ、君は熱しやすく、冷めやすい性格なのだよ」

明久「……本当は？」

ゴードン「僕の文才の低さです。はい」

明久「……すまん」

ゴードン「ゴメン」

〈第五問〉 勝機と空気（主人公が）

- side 明久 -

「坂本、今の戦況はどうだ？」

「Dクラスの連中と渡り廊下で交戦中だ。状況は良くないな……」

俺と坂本は今は教室にいる。

俺は振り分け試験を途中退席して点数がなかったため、回復試験を受けた。

「それにしても、やっぱりお前すげえな。一教科10分で全教科150点並みとか」

「当たり前だ。ま、腕輪がないから今回は出ないけど一応な」

「とりあえず、中堅部隊の奴らに戦線を維持させて、前線部隊を下げて回復試験を受けさせる」

……確か中堅部隊は須川と島田だったな。

「あいつらなら、補習への恐怖で逃げ出しそうだが……」

「確かにそうだな……よし、横田」

そこで坂本が横田に指示を出す。

「なんて伝えるんだ？」

「ああ、『逃げたらクロス』ってな」

「なるほど」

それはじつに効果的だ。

『全員突撃しろおーっ！』

「これでとりあえず前線は維持できるな」

「ああ」

- side 須川 -

くっ、やはりDクラスと言っても強い！

「須川！ 五十嵐先生と布施先生よ！ Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

立会人をを増やして一気に片をつけにきたか！

「島田、化学に自身は？」

「全くなし。60点台常連よ」

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近づかないよう注意しながら学年主任の所に行くぞ」

「高橋先生のところね？ 了解！」

「あつ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！ 五十嵐先生、こつちに来てください！」

「くっ！ ぬかったわ！」

Dクラスの一人に島田が見つかった。マズい。こつちも召喚獣で応戦しないと、二人揃って一撃で補習室送りだ。

「よし。島田、ここは俺が足止めするから先に離れろ！」

「ゴメン須川！」

「邪魔者は殺します！ 試獣<sup>サモン</sup>召喚っ！」

「試獣召喚っ！」

こつちにもFFF団会長のプライドがある！

『Fクラス	須川亮	VS	Dクラス	清水美春	』
化学	76点	VS	94点		

くそっ！ 点数はこつちが負けてる上に、操作がむずい。

「さあ死になさい豚野郎！！」

「ひどいっ…！」

このままじゃ補習室送りだ。

「 試獣召喚っ！」

『Fクラス	島田美波	V S	Dクラス	清水美春
化学	53点	V S	41点	』

そこで島田の召喚獣が清水の召喚獣を切り裂く。助かった、正直ヤバかったしな。

「ありがとう島田」

「いやいやお互いさまよ。あいつを補習室に送れるしね。西村先生、早くこの危険人物を補習室にお願いします！」

「おお、清水か。たつぷり勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」

これで召喚獣が戦死した清水は補習室に連行だ。

「お、お姉さま！ 美春は認めませんから！ このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」

とても危険な捨て台詞を残し、清水は去って行った。

「島田、とりあえず俺はテストを受けてくる。それまで戦線を頼むぞ」

「了解！」

「おい坂本。戦線は維持できたようだしき、本隊動かしたら？（バリバリ）」

「うーん、もう少し様子を見たい。……って何で菓子を食ってる？」

「ああ、暇だからな。家から持ってきた」

ほんと今日は何もすることねえしな。

「それ1枚くれ」

「あいよ」

ピンポンパンポーン《連絡致します》

そんな事をやってると放送が入った。この声は須川？

「何で放送が？」

「大かた先生を騙すんだろ」

なるほど、そうすれば少しは戦線を維持しやすいかな。

《船越先生、船越先生》

船越ってたしか数学の……。

《坂本雄二君が体育館裏で待っています》

……あれ？ 須川？

《生徒と先生の垣根を越えた、男女の大事な話があるそうです》

「お……おい、坂本？」

ふと隣を見ると坂本がプルプルと震えていた。

「代表……アンタあ男だよ！」

「ああ。まさかクラスのためにここまでやってくれるなんて！」

「……す」

「す？」

「須川あああああつっ！」

そして坂本は放送室へ向かった。

【Keep protecting yourself!!】

〈第五問〉 勝機と空気（主人公が）（後書き）

ゴードン「いやあ、今回空気だったね」

明久「全くだ。主人公誰？ って感じたぞ……」

ゴードン「あ。でも次話も空気だぞ」

明久「またかああああ！！」

〈第六問〉 それぞれの……

- side 明久 -

放送室から悲鳴が聞こえた後、坂本は本隊を連れて戦線に向かった。俺は教室にお留守番である。

坂本の戦争にかける思いは人一倍だ。昔は神童などと言われていたが、今は勉強がすべてではないと証明するために頑張ってる。

「……アイツと俺は似てるんだよな……」

そう、アイツと俺は似ている。俺は目的を見失い、一人になってしまった。けどあいつの周りにはたくさんの人たちがいる。代表として尊敬されてる。

「……だから嫌いなんだよ……」

これはただの同族嫌悪だ。似てるのに全然違うあいつが俺はうらやましいだけだ。

ほんと……どうすればいいんだよ……。

「ぶづ。島田、よくやった」

それから少しして皆が教室に戻ってきた。

「ええ。後さっきの放送は何なの?」

「須川の野郎が流したデマだ。……後5回コロス……」

とても恐ろしい単語が聞こえた。……俺はこいつのどどこが羨ましいんだろ?」

「さて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校してる生徒も見え始めたし、頃合いじゃろ?」

「……………(コクコク)」

「よっしゃ! Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ!」

『『『おつっ!』』』

教室から皆が出ていく。俺は帰る準備をしておくか。

その後、姫路のテストが終了してDクラス代表にとどめを刺したらしい。

試験召喚戦争終了後。俺が帰ろうとすると坂本と帰ることになっ

た。

「それにしても何で設備を交換しなかったんだ？」

あの後、何故か和平交渉で戦争を終結したらしい。実は気になってたから聞いてみる。

「何だ、気づいてなかったか。実は取引をしたんだ」

「取引？ 何のだ？」

「Bクラスの室外機を壊してもらっ」

Bクラスの室外機？ 確かスペースの関係でDクラスに間借りしてるやつか。

「何でそんなものを？」

「次のBクラス戦で必要になるからだ」

次はBクラスか……なら。

「次は俺も暴れていいか」

「ん？ 何でだ？ お前出たくないんじゃない……なるほど」

「ああ、Bクラスの代表はあの三下だからな。叩き潰したい」

「わかった。だが参加は途中からだ。いきなり警戒させたくないからな」

「だが、遠距離からの攻撃ならいいだろ？ 見えない敵にじわじわ倒されていくなんて最高じゃねえか」

俺の召喚獣は何故か大量の武器を持ってしな。銃あたりで倒す。

「それならいいぞ。見えない敵に気をそらさせて、冷静さを失わせろ」

「OK。次回もがんばろうぜ」

「ああ。もちろんだ」

そうして俺たちはそれぞれの帰路に行く。

【You should do what】

〈第六問〉 それぞれの……（後書き）

ゴードン「次回でやっと明久の召喚獣が出せるな」

明久「ああ。今回の戦争では俺は空気だったしな。俺が主人公だ！  
！」

ゴードン「次回もよろしく！」

## 〈第七話〉 戦後と戦前

- side 明久 -

Dクラスとの試召戦争の翌日、俺はいつも通り学校に向かう。

今日は皆が消費した点数を補給するためにテスト漬けのはずだ。頑張りますかね。

そして俺はいつもと同じように静かに席に着く。

「おう明久。時間ギリギリだな」

こいつはバカの坂本。バカの大將でバカである。

「なんかものすごい勢いでバカにされた気がするんだが……」

「はっ、気のせいだよ」

「そうか」

そして無駄に鋭い。

「そついえば坂本。お前はいいのか？」

「ん？ 何がだ？」

まさか……気付いてないのか？

「昨日の後始末だよ」

「ああ、須川のことか。大丈夫だぞ。死体は処分した」

「いや、死体の始末じゃなくて」

貞操の危機なのに、本当に気付いてないのか？

「今日の数学の監督、船越先生だぞ」

そう言った瞬間、坂本は教室を飛び出し廊下を疾走した。

「はあー……なんとか貞操は守り抜いたぞ……」

坂本がそう言っただけに突っ伏す。

とりあえず四教科が終了。

坂本は近所のお兄さん（三十九歳／独身）を紹介して船越先生の魔の手から逃げ切ったらしい。

「はあ、なんとか腕輪は取れるかな」

今回は全教科いい感じにペンが進んだし。

「さすがじゃのう」

「……………保健体育なら負けない」

そこに木下と土屋がやってくる。

木下は髪をポニーテールにしてる。……………そんなだから女子に間違えられるんじゃない？

「よし、昼食食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「お前の体はどういう構造をしてるんだ……………。俺は弁当だから屋上で食う」

俺は一人で食いたい。

「じゃあ俺たちも屋上に行くか」

「おい」

なんで来るんだよ。

「一人じゃ寂しいじゃろう？」

「友達と一緒に飯を食うもんだぞ」

「……………久しぶりに語りたい」

「坂本。なんで俺がお前の友達になってるんだ。それと土屋、食事中にエロはやめろ」

「……………！(ブンブン)」

はあ、どうせついて来るんだろ……。

「わかったよ……。屋上に行こう」

「おお」

「あ、みんな屋上に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうわね吉井？」

「……………チッ」

なんでこうなったし……。

「あ、あの。皆さん……………」

立ち上がって屋上に行こうとしたら声をかけられた。

「うん？ あ、姫路。一緒に行くか？」

坂本が声をかける。

「あ、いえ。え、えっと……………、お、お昼なんですけど、皆さんの分を……………」

は？ ……ちょっと待って……。

「もしかして俺たちの分も作ってきてくれたのか？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

はあああっ！？

「迷惑なんかじゃないよな。明久」

「……………（ダラダラ）」

「おい明久？」

「お、俺はやっぱり食堂で食べるよ……………」

「いきなりどうしたんだ？」

やばい……………小学校の時のトラウマがッ……………。

「……………（ボタン）」

「おい明久？ 明久ああッ！？」

そこで俺の意識は途絶えた。

「あなた、また倒れたのね」

「……すみません」

今、俺は保健室にいる。小学校の修学旅行の記憶を思い出して倒れたっばい。

「あなたのクラスの子もさっき運ばれて来たわよ」

「あいつら……あれを食ったのか……」

安らかに眠れ……。

さて、教室に戻ろうかな。

「そついえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

俺は保健室で飯を食った後、復活した坂本たちに弁当の悲劇について詳しく話した。皆、顔が青ざめていた。

……とりあえず姫路には島田が料理を教えることに。

その後教室で会議をすることになった。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

それにしてもBクラスのエアコン室外機を何に使った？ Aクラスに攻めるのには関係ないしな……。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

俺たちの目標はAクラスだ。Bクラスと戦うのにはどんな意味が？

「正直に言おう。どんな戦力でもAクラスには勝てやしない」

「でも明久は主席以上の学力の持ち主じゃし、姫路は元学年次席じゃぞ？」

「確かに二人は強い。だが二人だけでAクラス全員の相手なんて無理があるだろう？」

確かに……俺は50人の相手が出来ないこともないが、能力の燃費が悪いし途中で戦死するだろう。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、Aクラスをやる」

じゃあBクラスとやるのは……なるほど！

「すなわち坂本はBクラスを使ってAクラスとの一騎打ちに持ち込むつもりか」

「ああ。その通りだ明久。戦争のルールを使ってBクラスと交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスに勝つたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスに攻め込むように交渉すればいい」

「勝つたら設備を入れ替えることのできるルールを利用するわけじゃない」

これならFクラスの設備を免れ、Cクラス程度の設備で済むだろうしな。

「そういうことだ。それをネタに『Bクラス戦の勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

モチベーションの差を利用するわけだな。

「一騎打ちは明久なら勝てるじゃろうしな」

「いや、明久を一騎打ちに出すと相手はまだ勝ち目のある連戦を選ぶだろう」

「じゃあどうするの？」

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

そして坂本はニヤリと笑った。

〈第七話〉 戦後と戦前（後書き）

ゴードン「ついに次話では明久の召喚獣が登場!？」

明久「やっとかよ。待ち侘びたぜ！」

ゴードン「それにしても姫路の飯のこと知ってたんだな」

明久「ああ。小学校のころは一応友達だったからな……」

ゴードン「次回もよろしく！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7339x/>

---

光を求め、光を拒む青年

2011年10月28日17時03分発行